九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

六朝詠桐詩考 : 沈約より庾信に至る「龍門の桐」

中尾, 健一郎
九州大学大学院

https://hdl.handle.net/2324/1524280

出版情報：九州中國學會報. 40, pp.19-35, 2002-05-11. 九州中国学会
バージョン：
権利関係：

六朝詠桐詩考

――沈約より庾信に至る「龍門の桐」――

中尾健一郎

六朝末期の詩人である庾信（五一三―五八一）の代表作の一つに、「枯樹賦」（『庾子山集』巻一）がある。祖国梁が滅亡し、北朝へ仕えることを余儀なくされた自身の心情を、一本の枯樹に託して詠った力作である。興膳宏氏の論文「枯木にさく詩――詩的イメージの一系譜――」[1]は、この作品のモチーフとして、漢の枚乗（？―前一四〇）の「七発」（『文選』巻三十四）と、『世説新語』「黜免篇」に登場する東晋の殷仲文（？―四〇七）との故事を指摘しておられる。しかし、枚乗「七発」に詠われた半死半生の桐（龍門の桐）が、直接、庾信の創作に影響を与えたものであったのだろうか、と素朴な疑問を抱いた。庾信が前半生において身を置いた江南には、つとに知られるように斉梁期の詠物詩の盛行が見られており[2]、庾信もその影響を免れなかったであろうことは、彼の文集に少なからぬ詠物の詩賦が見えることに明らかである。興膳氏の論文は枯木を通時的に扱っておられるため、龍門の桐を詠った作品の紹介は一部にとどまるが、筆者は庾信が龍門の桐を用いて詩賦に自らの想いを詠うにあたって、斉梁文壇の領袖であった沈約（四四一―五一三）の影響も少なくなかったのではないかと考えた。何故ならば、沈約と庾信は六朝において、桐を詩に多く詠み込む詩人の一人であり（次頁の表を参照）、かつ自らの想いを「龍門の桐」に託しているからである。また、沈約は前代の詩人の桐（琴材）を詠う詩を受け継いでいると見なされ、ここに「琴材に託して想いを述べる詩人の系譜」とでも言うべきものが存在すると考えられるのである。そしてその系譜が表わすのは、琴材が人材の比喩

であるということであり、沈約以降、この系譜に沿って詠われる「龍門の桐」は、すぐれた人材を象徴化したものであると考えられる。つまり、庾信が自らを喩えた「龍門の桐」のモデルは、半死半生という属性こそ強調されてはいないものの、既に斉梁期に成立していたと考えられるのである。そこで小論においては、前掲興膳氏の考察より更に一歩進めて、庾信以前の詠桐詩の系譜を明らかにし、あわせて六朝における琴材としての桐、特に「龍門の桐」を詠う詩が持つ意義や、それと「枯樹賦」との関わりを述べたいと思う。

魏	曹丕 1	曹叡 1	**王粲** 1	嵇康 1						
晋	**司馬彪** 1	張載 1	棗據 1	陸雲 1	劉琨 1	謝安 1	孫統 1	鳩摩羅什 1		
劉宋	**鮑照** 1	顔延之 1	謝瞻 1	鮑令暉 1						
南斉	**謝朓** 1	**王融** 2								
梁	蕭衍 1	蕭統 1	蕭綱 6	蕭子顯 1	蕭瑱 1	江淹 4	范雲 1	何遜 2		
梁	**沈約** 7	**王筠** 1	呉均 4	庾肩吾 7	劉孝先 1					
陳	沈烱 1	**徐陵** 2	**張正見** 2	江総 2	陳叔達 1					
北魏	温子昇 1									
北斉	邢邵 1	**蕭慤** 1								
北周	王褒 1	高琳 1	**庾信** 12							
隋	薛道衡 1	元孝恭 1	李徳林 1	劉臻 1	虞世基 1	段君彦 1	**魏彦深** 1	陸季覧 1		

※　右の表に挙げるのは、詩、及び詩題に「桐」字を用いるか、或いは「龍門」の地名を桐・木（桐以外の固有の名称を持つ木は除く）と結びつけて使用している詩人である。人名の下の数字は、その使用回数を表わす。ゴシックの詩人は、同一作品において桐（または龍門の地名が、桐・木と結びつけられているもの）と、琴・瑟とを詠み込んでいるものを表わす（詩題、並びに琴の意で用いられる「絲桐」も含み、「桐柏山」、「桐（君）」等、地名・人名に用いられている「桐」字は含まない）。また、無名氏の楽府は除外した。なお、全てを挙げずに恐縮であるが、表の作成にあたって、松浦崇氏による全漢詩より隋詩に至る諸索引（櫂歌書房より刊行）、佐藤利行氏等編『全梁詩索引』（東京、白帝社、二〇〇〇年）を参照させていただいた。ここに謝意を表したい。

一　琴材という人材の比喩の源流――加工される木材

まず、琴材としての桐を詠う詩を取り上げる前に、琴材を含む木材が、何故に人材に喩えられるかを述べておきたい。前漢の劉安（?―前一二二）の『淮南子』「主術訓」には、賢人が人材を起用することは、名工が木材を加工することに似ることが説かれている。

是故賢主之用人也、猶巧工之制木也。……是故林莽之材、猶無可棄者、而況人乎。

［是の故に賢主の人を用うるや、猶お巧工の木を制するがごとし。……是の故に林莽の材すら、猶お棄つべき者無し。而るを況んや人をや。］

また、劉安は「主術訓」に説く思想を賦によっても表わしている。次に挙げる「屏風賦」がそれである。

惟斯屏風、出自幽谷。根深枝茂、号為喬木。……然常無縁、悲愁酸毒、天啓我心、遭遇微禄。中郎繕理、収拾捐朴。大匠攻之、刻雕削斲。表雖剥裂、心実貞慤。等化器類、庇蔭尊屋、列在左右、近君頭足。……不逢仁人、永為枯木。

[惟れ斯の屏風、幽谷自り出ず。根は深く枝は茂り、号して喬木と為す。……然れども常に縁無く、悲愁酸毒せしに、天は我が心を啓き、微禄に遭遇せしむ。中郎は繕理し、捐朴を収拾す。大匠は之を攻り、刻雕削斲す。表は剥裂すと雖も、心は実に貞慤なり。等しく器類と化し、尊屋に庇蔭せらる。列びて左右に在り、君の頭足に近し。……仁人に逢わずんば、永に枯木たらん。

（『初学記』巻二十五　器物部「屏風」所引）

この賦について宋の章樵は『古文苑』[3]に、遺棄された人材が登用されることを詠うものであり、喬木を見出して加工する「中郎」は劉安その人を暗に示すものである、と注する。そうだとすれば、劉安はまさに人材の登用を木材の加工に喩えて、「屏風賦」を作ったと言える。このように中国の詩賦においては、樹木が伐採されて加工されることが、在野、あるいは下位にある士人が抜擢されることに喩えて詠われることがある。また、琴に関しては、『礼記』の「楽記」に、「君子は琴瑟の声を聴けば、則ち義を志す臣を思う」といい、後漢の桓譚（前二三―後五六）は『新論』に、神農氏が王となった時、桐を削って琴を作り、これによって神明に通じ、天と人との調和をはかったことを述べている。[4]もちろん、青木正児氏の「琴棊書画」[5]にも、孔子の「絃歌鼓琴」による政教方針について述べられているように、琴とは単なる楽器ではなく、政教と大きく関わる器物であると見なすことができるであろう。琴材が人材に喩えられる詩が中国で誕生するには、こうした思想的背景があったものと思われる。

二　司馬彪と鮑照

西晋の司馬彪（？―三〇六）と劉宋の鮑照（四一四―四六六）は、いずれも自身を桐（琴材）に喩えており、これが自身の仕官と関わることを窺わせる詩文を残している。まず始めに司馬彪の「贈山濤詩」を取り上げよう。桐を自身に喩える発想が、彼のオリジナルの創作なのかどうかは定かでないが、管見の及ぶ限りにおいては、琴に加工されることを望む桐に自身を仮託して詠う詩歌としては最初の例である。(6)

苕苕椅桐樹　寄生於南岳　　苕苕たり椅桐の樹、生を南岳に寄す
上凌青雲霓　下望千仞谷　　上は青き雲霓を凌ぎ、下は千仞の谷を望む
処身孤且危　於何託余足　　身を処(お)くところは孤にして且つ危、何(いず)くに於いて余が足を託さんか
昔也植朝陽　傾枝俟鸞鷟　　昔は朝陽に植えられ、枝を傾けて鸞鷟を俟(ま)てるも
今者絶世用　倥偬見迫束　　今は世用を絶ち、倥偬として迫束せらる
班匠不我顧　牙曠不我録　　班匠は我を顧みず、牙曠も我を録せず
焉得成琴瑟　何由揚妙曲　　焉(いず)くんぞ琴瑟と成るを得ん、何に由り妙曲を揚げん

（『文選』巻二十四）

唐の李善はここに詠まれている桐を司馬彪その人、公輸班、匠石、伯牙、師曠を執政の喩えとし、更にこの桐が『詩経』（大雅・巻阿）、並びに鄭玄の箋を踏まえたものであることを注する。(7) とすると、これは単なる桐ではなく、鳳凰を住まわせるにふさわしい立派な桐である。それが零落して無用の存在と化している。つまり司馬彪は下位に埋

もれた有用の人材である自身の不遇を、山濤（二〇五－二八三）に訴えているというのである。山濤は竹林の七賢の一人であるが、のちに晋の宰相となった人物であり、また、『世説新語』「政事篇」には、多く士人を推薦した故事が見える。司馬彪が自身の登用を求めたのもそれゆえであったと考えられる。そして次に見える「与山巨源書」に述べられている謝辞を見る限りでは、司馬彪の希望はかなえられたようである。

根抜失據、託命此別、告求矜愍、許見賑恤。窮人易感、悲喜兼懐。承命之後、情過挾紘。

［根は抜かれて據るところを失い、命を託して此に別れ、矜愍を告求し、許し賑恤さる。窮人感じ易く、悲喜兼ねて懐く。命を承けて後、情は挾紘を過ぐ。］

（『太平御覧』巻四百八十六人事部「窮」所引）

冒頭の「根抜失據」が、前掲の詩の桐を踏まえ、不遇にある司馬彪を表わすことは明らかである。文末の「挾紘」とは、『左伝』の宣公十二年に見える語で、寒人が綿を賜るような温情をいい[8]、司馬彪はこれを踏まえて、その身にしみる温情に感謝の意を示したのである。さて、司馬彪の詩は推薦を依頼する、仕官以前のものであったが、次に取り上げる鮑照の「山行見孤桐詩」も同様に、権力者に対して不遇な自身の登用を促したものと考えられる。

桐生叢石裏　根孤地寒陰　桐は生ず　叢石の裏、根は孤にして地は寒陰なり
上倚崩峯勢　下帯洞阿深　上は崩峯の勢に倚り、下は洞阿の深きを帯ぶ
奔泉冬激射　霧雨夏霖淫　奔泉　冬に激射し、霧雨　夏に霖淫たり
未霜葉已肅　不風條自吟　未だ霜ふらざるに葉は已に肅れ、風ふかざるに條自ら吟ず

昏明積苦思　昼夜叫哀禽　　昏明　苦思積もり、昼夜　哀禽叫ぶ
棄妾望掩涙　逐臣対撫心　　棄妾　望みて涙を掩い、逐臣　対いて心を撫づ
雖以慰単危　悲涼不可任　　以て単危を慰めんとすと雖も、悲涼　任うべからず
幸願見雕斷　為君堂上琴　　幸願わくは雕斷せられ、君が堂上の琴と為らん

（「山行見孤桐詩」『鮑氏集』巻六）[9]

司馬彪の詩と同様に、桐が鮑照自身の仮託であるとする根拠は、劉宋の元嘉二十八年（四五一）、鮑照が侍郎の職を辞するにあたり、始興王・劉浚に向けて書いた「侍郎報満辞閣疏」[10]に、前掲詩、第二句の「根孤」の二字が用いられており、これは鮑照の作品に二例しか見られないからである。

日晏途遠、塊然自喪。加以無良、根孤伎薄。既同馮衍負困之累、復抱相如消渇之疾。……宿福余慶、爰遘聖明。

［日晏れて途遠く、塊然として自ら喪う。加うるに良きこと無く、根は孤にして伎は薄し。既に馮衍の負困の累に同じく、復た相如の消渇の疾を抱く。……福を宿して余慶あり、爰に聖明に遘えり。］

（『鮑氏集』巻九）

孤独にして貧困に苦しむ鮑照の姿は、危うい地勢に根ざし、厳しい環境に置かれた桐そのものである。「侍郎報満辞閣疏」には、そのような鮑照を劉浚が取り立ててくれたにもかかわらず、恩義に十分に報いないまま辞職することが述べられるのであるが、この文と前掲の詩をあわせて考えると、琴材である桐が人材の喩えとして詠われていることが明らかであろう。次に取り上げる沈約は鮑照に倣ったと言われているが[11]、桐を詠う詩に関しては、間違いなく鮑

照に倣い、そして桐に固有の名称を用いた。龍門の桐である。これは南斉の竟陵王・蕭子良（四六〇－四九四）の文学サロンにおいて詠われたものであった。

三　沈約と王筠

竟陵王・蕭子良の文学集団、並びに斉梁の詠物詩については網祐次氏による詳細な先行研究があるが、[12] 蕭子良の幕下で共作されたと見られる桐、あるいは龍門の桐に関するものとして、次の作品が挙げられる。[13]

蕭子良「梧桐賦」（『初学記』巻二十八）
王融「応竟陵王教桐樹賦」（『芸文類聚』巻八十八）、沈約「桐賦」（同上）
謝朓「詠琴詩」（『初学記』巻十六）、王融「詠琵琶詩」（同上）

これらの作品には、沈約、王融（四六七－四九三）、謝朓（四六四－四九九）のいずれもが、枚乗の「七発」に登場する龍門の桐を詠い、特に後二者は楽器の素材として詠っている。しかし、興膳氏が前掲論文において沈約の「詠孤桐詩」（『初学記』巻二十八）、謝朓の「遊東堂詠桐詩」（同上）等も挙げて述べるように、これらはいずれも作者自身の姿を投影させたものとは考えにくい。[14] だが、例外は存在する。沈約が蕭子良の幕下を離れ、太守として東陽郡（現在の浙江省金華市）に赴任した頃の作、「霜来悲落桐詩」がそれである。[15]

悲落桐　落桐早霜露　悲しいかな落桐、落桐は霜露よりも早し
燕至葉未抽　鴻来枝已素　燕至れるも葉未だ抽きいでず、鴻来たるに枝は已に素し
本出龍門山　長枝仰刺天　本は龍門山より出で、長枝　仰ぎて天を刺せり

上峯百丈絶　下趾万尋懸　　上峯　百丈に絶え、下趾　万尋に懸かる
幽根已盤結　孤株復為絶　　幽根　已に盤結し、孤株　復た絶えなんとす
……　……　……　……
匠者時留盻　王孫少見之　　匠者は時に留まり盻みるも、王孫も之を見ること少なり
分取生孤枿　徙置北堂陲　　生の孤なる枿より分かち取り、北堂の陲に徙し置く
……　……　……　……
自惟良菲薄　君恩徒照灼　　自ら惟うに良に菲薄、君恩徒に照灼す
顧已非嘉樹　宜用憑阿閣　　顧みれば已に嘉樹に非ず、宜しく用いらるるべきも阿閣に憑るのみ
願作清廟琴　為舞双玄鶴　　願わくは清廟の琴と作り、為に双の玄鶴を舞わさん

（「霜来悲落桐詩」『玉台新詠』巻九）

「霜来悲落桐詩」には、地方官として中央を離れ、志を得ない沈約の悲哀が詠われているのであるが、司馬彪の詩と比べれば、その境遇が具体的に描かれている。まず、「龍門山」より移し置かれた桐が詠われるが、その桐は琴材とは認められなかった。それゆえに為政者の喩えである匠者、あるいは王孫の目にかろうじてかかり、採取されはしたものの、加工されることなく、建物の傍らに放置された。人材として採用されてはいるが、地方で無聊をかこっている、というのである。それゆえに自身はかつてと違って素晴らしい樹木ではないかもしれないが、出来ることなら宮殿で祭礼を行う際に演奏される琴となって爪弾かれたい、と続けられる。「願作清廟琴」の句は、『周礼』の「春官・大司楽」に基づく句である。[16] これに龍門の琴は宗廟において奏される、とあることを引き、龍門の桐にも比せられる自身は、地方官の待遇に甘んじるべき人材ではなく、国家の中枢で政治に参画することを望んでいる、と言うのであ

る。沈約が東陽太守となるに至った経緯には更に複雑な事情があったようであるが[17]、沈約が現状に満足していなかったであろうことは、この詩の主題が、司馬彪の詩と同工異曲であることから明らかである。

ところで、ここで注目したいのは蕭子良の文学サロンにおいて、琴・琵琶の素材として詠われた龍門の桐が、沈約によって再び詠われ、かつ自身を仮託した存在となっていることである。蕭子良のサロンにおいて、琴・琵琶の素材として龍門の桐が詠われたことは既に述べたが、管見の及ぶ限り、枚乗の「七発」から沈約等に至るまで、詩並びに題に桐を冠する賦、そして桐を材料とする琴、箏、琵琶、箜篌の賦に、龍門の桐は詠われていない。つまり、沈約、王融、謝朓の誰が詠い始めたかは不明であるが、蕭子良のサロンがなければ、沈約が自らを仮託して龍門の桐を詠うことはなかったかもしれず、「龍門山」から来た零落した桐は、ある意味では遊戯的な詠物詩の産物であったと言えるかもしれない。そうした経緯は兎も角、沈約の詩における桐は、新たに「半死半生」、「極上の琴材」という属性を加えて、王筠（四八一―五四九）へと受け継がれたと考えられる。

王筠は、沈約から「晩来の名家、唯だ王筠の独歩するを見るのみ」、と激賞された人物であり、『梁書』には、沈約との間に往来があり、その邸宅に「草木十詠」という連作詩を書き付けたことが記されている[18]。そうしたことから判断すると、次に挙げる王筠の詩は、沈約の詩の影響を受け、半死半生の龍門の桐を詠ったものであると見なすことが出来るだろう。

伊昔擅羽儀　待価龍門垂　　伊れ昔　羽儀を擅ままにし、価を龍門の垂に待つ
優遊清露点　微穆恵風吹　　優遊　清露点じ、微穆　恵風吹く
月上陰陽幹　雲覆死生枝　　月は陰陽の幹に上り、雲は死生の枝を覆う
公子存高尚　聊用影華池　　公子は高尚を存し、聊か用いて華池に影ささしむ

棲鸞既不重　舞鶴復何施　　棲鸞　既に重んじられず、舞鶴　復た何(いず)くにか施さん
方同散木爨　清響竟誰知　　方(まさ)に散木と同(とも)に爨(かし)がれんとす。清響　竟(つい)に誰か知らん

（「奉酬従兄臨川桐樹詩」『芸文類聚』巻八十八「木部上」桐所引）

王筠が従兄に宛てて作った詩に詠われるのは、琴材である「龍門の桐」にも類する才能と抱負を有する自身が、公子によって、琴材ではなく、無用の木材（人材）と見なされていることに対する不満である。そして琴となって清らかな音色を奏でられない、という桐の失望は、不遇をかこつ王筠自身の失望でもある。このように龍門の桐に自身を託す詩は、沈約から王筠へと継承されているのであるが、梁においては呉均（四六九－五二〇）が「共賦韻同詠庭中桐詩」（『初学記』巻二十八）に、誰にも知られずにいる龍門の桐を詠い、また、楽府「行路難」第二首（『玉台新詠』巻九）に、洞庭湖畔に倒れていた枯桐が琵琶へと仕立て上げられ、宮中で重宝されることを詠う。その他、桐であることは明示されていないが、「嘉樹」[19]が琴材として加工されることを望むことを詠った丘遲（四六四－五〇八）の「題琴朴奉柳呉興詩」（『芸文類聚』巻四十四）があり、両者とも有為の人材としての自身を桐に仮託したと見られる。これらの作品における沈約の影響の有無は明らかでないが、梁になって自身の登用を求める気持ちを桐に仮託する詩が、詩人たちの間で認知されていたことは確かであろう。そしてこれまで見てきたように、琴材を人材と重ね合わせ、桐に託して想いを詠う詩人の系譜は、司馬彪以来、梁に至るまで脈々と受け継がれていたのである。

四　庾信

本来、桐・琴材を詠う詩の系譜に庾信は入れられるべきではない。何故なら六朝時代の詩人において、もっとも多

く桐を詩に詠み込んだ詩人であるにもかかわらず（冒頭の表を参照）、意外なことに庾信は専ら桐を詠う詩を一首も作っておらず、「枯樹賦」に詠われる枯木の詩的イメージに、龍門の半死半生の桐を部分的に重ねたにすぎないからである。しかし、興膳氏が前掲論文に庾信の詩賦の数句を挙げて説くように、庾信は半死半生の桐に自身を仮託しているものと見なされるため[20]、桐・琴材を詠う詩の系譜とも無関係ではない。そこでここに庾信も取り上げることにする。ところで、庾信の作品における桐とは、琴材を意味するのであろうか。彼が作った北周の「郊廟歌辞」・「燕射歌辞」（『庾子山集』巻七）には、琴材としての桐が用いられている[21]。だが、これらは北周の王室のために作られたものであり、庾信自身の姿は投影されていない。ところが、詩以外の作品に目を転じると、その限りではない。庾信の代表作「哀江南賦」、「擬詠懐詩」と関係の深い「擬連珠[22]」の第三十一首に、憔悴しつつも梁に対する想いを絶やさない自身の姿が描かれ、その心が音曲に喩えられている。

蓋聞十室之邑、忠信在焉、五歩之内、芬芳可録。是以日南枯蚌、猶含明月之珠、龍門死樹、尚抱咸池之曲。
［蓋し聞く、十室の邑、忠信焉に在り、五歩の内、芬芳録すべし、と。是を以て、日南するも枯蚌、猶お明月の珠を含み、龍門の死樹[23]、尚お咸池の曲を抱く。］

（『庾子山集』巻十）

つまり、これと「枯樹賦」を合わせて考えるならば、庾信の枯樹は、やはり琴材・人材としての側面もあわせ持っていた、と言えるだろう。ただ、不幸にして北遷の後、庾信の内面に秘められた想いは、祖国のために役立てられることはなかった。そのため、庾信の詩賦に詠われる龍門の桐は、すぐれた琴材（人材）というよりは、半死半生の零落した老木（老人）のイメージを強烈に残すこととなり、その結果、沈約と王筠が仮託したすぐれた琴材（人材）と

しての側面を大きく後退せしめることになったのである。

おわりに

以上、司馬彪から鮑照、沈約、王筠へと継承される琴材を詠う詩人の系譜を明らかにし、桐・琴材が有為の人材の喩えとして詠われること、特に龍門の桐がすぐれた人材の喩えとして詠われることを述べたが、小論をまとめると次のようになる。司馬彪以来、詩人が自身を仮託した琴材としての桐は、不遇を訴える手段として詠われていた。そして桐が琴へ加工されることは、不遇な境遇から引き上げられ、登用されることの喩えであった。沈約は「霜来悲落桐詩」に、単なる桐を龍門の桐という最高級のものへと置き換えることにより、詩人の人材としての自負心を強く表わし、また、その手法は王筠へと受け継がれた。しかし、祖国を滅ぼされ、故国に忠誠を尽くすことができなかった庾信は、有為であり登用されるべき人材という側面よりも、その半死半生という特性を大きくうち出して、龍門の桐に自身を仮託した。その結果、沈約・王筠によって、すぐれた人材の比喩とされた龍門の桐は、これを換骨奪胎した庾信の名作「枯樹賦」のために、すぐれた人材というよりは、零落し生意の尽きた詩人の形象を負うこととなった。

庾信の「枯樹賦」の価値は、既に興膳氏をはじめとする多くの研究者によって言及されている。だが、ここまで考察を進めると、「枯樹賦」とは、もしかすると、人材として扱われるべき庾信自身の不遇を、北朝の人々に訴えかけるために作られたのではないか、という疑念が生じる。賦の前半に「匠石」、「公輸班」が散木らしき樹木を加工し、木工品を作ることが詠われるが、[24] これは梁において自身が重んじられたことを指すのではないか。何故なら、司馬彪の「贈山濤詩」に見えるように、両者は為政者の比喩だからである。また、賦の後半には、逆に根本から抜かれ、放置された枯樹が登場するが、[25]「抜本垂涙、傷根瀝血」とは、前掲、「与山巨源書」に見える「根抜失據」を踏まえてい

るのではないか。そうであれば、これは頼るところの無い不遇な司馬彪と同じく、北朝において頼るものがない、不遇な庾信の状況を喩えるであろう。実際、賦の最後段には、零落した庾信の姿が描写されるのである。[26] そう考えれば、「枯樹」が形容するものは、半死半生の詩人にとどまらず、すぐれた人材でありながら零落した庾信を喩えている可能性が非常に強い。小論においては、この問題について多くを語る余裕が無いが、人材の喩えとして琴材を詠う詩の系譜は、庾信の作品に、確かにその影を落としていると言えるのである。

注

(1) 興膳宏『乱世を生きる詩人たち　六朝詩人論』(東京、研文出版、二〇〇一年) 所収。また、庾信と『枯樹賦』については、同氏の『庾信』(東京、集英社、一九八三年) に詳しい。参照されたい。なお、庾信の作品は、すべて『庾子山集』(四部叢刊初編本) に拠り、併せて清・倪璠注、許逸民校点『庾子山集注』(北京、中華書局出版、一九八〇年) を参照した。

(2) 六朝の「詠物詩」については、網祐次『中国中世文学研究　南斉・永明時代を中心として』(東京、新樹社、一九六〇年)、小尾郊一『中国文学に現われた自然と自然観』(東京、岩波書店、一九六二年)、森野繁夫『六朝詩の研究』(東京、第一学習社、一九七六年) に詳しい。

(3) 四部叢刊初編所収。該当する注は、以下のとおり。「因木有自然奇恠之形、連合為屏風、譬世有遺棄之材、遭時見用。……安、自謂及中郎也」。

(4) 該当する文は、以下のとおり。「君子聴琴瑟之声、則思志義之臣」(以上、『礼記』)。「神農氏継宓羲而王天下。亦上観法於天、下取法於地。近取諸身、遠取諸物。於是始削桐為琴、縄絲為絃、以通神明之徳、合天人之和焉」(以上、『新論』)。

(5) 『青木正児全集』第七巻 (東京、春秋社、一九七〇年) 所収。

(6) 桐が琴材として詠われる最古の用例は『詩経』であり、「鄘風・定之方中」に「樹之榛栗、椅桐梓漆、爰伐琴瑟」とある。また固有の産地を持つ琴材には、『尚書』「禹貢」に見える「嶧陽孤桐」、『周礼』の「春官・大司楽」に見える「雲和」、「空桑」、「龍門」(すべて山名) の樹木 (樹名は不明) がある。楽器の素材としての「嶧山の桐 (樹)」は、晋の曹毗、鈕滔母孫

氏の「箜篌賦」（『初学記』巻十六）、陳の江総「賦得詠琴詩」（同上）、北魏の鹿悆「諷真定公詩」（『古詩紀』巻一百十八）、北斉の蕭慤「臨高台」（同集巻一百二十）に見え、「龍門の桐」は、枚乗「七発」以後、沈約等に至るまで見えない。「空桑」は『楚辞』「大招」に、「雲和」は晋の張協「七命」（『文選』巻三十五）に、それぞれ琴瑟の名称として用いられているが、何故、「嶧山」・「龍門」の桐だけが、特別なものとして詠われたのかは不明である。「龍門の桐」については、あるいは『世説新語』「徳行篇」に見える「登龍門」の故事と関わりがあるかもしれないが、憶測の域を出ない。小論に言及する詩賦の他に、六朝期に桐を主題として詠われる詩賦（「龍門の桐」にふれるものは除く）には、『芸文類聚』巻八十八所収、魏の明帝・曹叡の楽府「猛虎行」、晋の傅咸「梧桐賦」、夏侯湛「愍桐賦」、劉宋の袁淑「桐賦」、伏系之「詠梧桐詩」、梁の簡文帝・蕭綱「賦得双桐生空井詩」、『初学記』巻二十八所収、南斉の劉義恭「桐樹賦」、隋の魏彦深「詠桐詩」、『文苑英華』巻三百二十四所収、隋の虞世基「零落桐詩」、陸季覧「詠桐詩」がある。魏彦深の詩に、琴瑟に加工されることを拒絶する桐が詠われることを除けば、いずれも琴材としての桐を詠うものではない。その他、小論でふれた詩以外に龍門の桐を詠うものに、南斉の王融「詠梧桐詩」（『古詩紀』巻五十七）、陳の陸瑜「琴賦」（『初学記』巻十六）、陳叔達「聴隣人琵琶詩」（同上）、張正見「賦得威鳳棲梧桐詩」（『初学記』巻三十）があること、桐以外の琴材を扱ったものに、梁の呉均「重贈臨蒸郭某詩」（『文館詞林』巻一百五十八）の「桂」、蕭綱「箏賦」（『文苑英華』巻七十一）、陳の陸瓊「玄圃宴各詠一物得箏詩」（『初学記』巻十六）の「泗濱の梓（樹）」があることを付け加えておきたい。

（7）該当する注は、以下のとおり。「椅桐、彪、自喩也。……班匠、及牙曠、皆喩執政也」。「大雅・巻阿」に「鳳凰鳴矣、于彼高岡、梧桐生矣、于彼朝陽」。鄭玄の箋に「鳳皇之性、非梧桐不棲、非竹実不食」とある。網祐次氏は、注（2）所掲の著書に、詠物詩には物を擬人化して、その物の心を述べるものがあることを指摘する（一七八～一八二頁）。また、同氏は「宋末までには、物を述べた詩は少なくないが（但、器物は稀）、その表現面を観察するに、それらよりも寧ろ、物に作者の意を託した詩の方が、永明詩人の詠物詩の表現に、著しく近いと思われる」（二四六頁）と述べる。小論で扱う琴材を詠う詩は、こうした劉宋以前の流れを受ける詩であると考える。

（8）「申公巫臣曰、師人多寒。王巡三軍、拊而勉之、三軍之士、皆如挾纊」。「纊」とは「綿」のことである。

（9）鮑照の詩文は『鮑氏集』（四部叢刊初編本）に拠り、文字の異同等については銭仲聯『鮑参軍集注』（上海、古典文学出版社、一九五八年）を参照した。

（10）「侍郎報満辞閣疏」の制作時期は、注（9）所掲、『鮑参軍集注』附録の「鮑照年表」に拠った。

(11) 『詩品』に「詳其文体、察其余論、固知憲章鮑明遠也」とある。鮑照の詩が沈約に影響を及ぼしたであろうことは、注(2)所掲の網氏の著書（四〇六、四〇七頁）を参照。

(12) 注(2)所掲、網氏の著書（四一～二四六頁）を参照。

(13) 陳慶元『沈約集校箋』（杭州、浙江古籍出版社、一九九五年）附録「沈約事迹詩文繫年」に、同氏は沈約が蕭子良の文学集団に属したのは、永明五年から十一年（四八七～四九三）と見なし、「桐賦」（同著　十六、十七頁）の箋に、桐を詠う賦が共作であった、という見解を示されている。また、陳氏は前掲の年譜に、沈約の「詠篪詩」、謝朓の「詠琴詩」、王融の「詠琵琶詩」を永明八年の作と見なす（五六〇頁）。これにしたがう。

(14) 注(1)所掲、『乱世を生きる詩人たち　六朝詩人論』の五五三頁、五六三、五六四頁を参照。

(15) 注(13)所掲、『沈約集校箋』に、陳氏は『金華府志』を引き、「霜来悲落桐詩」を含む連作詩「八詠詩」が、南斉の隆昌元年（四九四）の作であると指摘する（四六一頁）。以下、該当部分を呉相湘主編『金華府志』（台北、台湾学生書局、一九六五年）巻三十より引用する。「八詠詩、旧南斉隆昌元年、太守沈約所作。留題于玄暢楼壁間、時号絶唱」。

(16) 「陰竹之管、龍門之琴瑟、九徳之歌、九磬之舞、於宗廟之中奏之」。

(17) 注(2)所掲の著書に網氏は、沈約が東陽太守として蕭子良のもとを離れたのは、永明末に南斉の武帝の後継者をめぐる争いを避けること、そしてかつて家令を務めたことのある文恵太子・蕭長懋の死が、その動機であったのではないか、と推測する（六三、六四頁）。

(18) 『梁書』巻三十三「王筠伝」に、「約於郊居宅造閣斎、筠為草木十詠、書之於壁、皆直写文詞、不加篇題。……約常従容啓高祖曰、晩来名家、唯見王筠独歩」とある。

(19) 「嘉樹」については、『楚辞』「九章」の橘頌に「后皇嘉樹、橘徠服兮」とある。丘遅はこれを踏まえ、屈原が自らを橘に喩えたように、自らを琴材である「嘉樹」に喩えたものと考えられる。

(20) 注(1)所掲、『乱世を生きる詩人たち　六朝詩人論』の五六〇～五六四頁を参照。

(21) 該当する詩句は下記のとおり。「泗濱石、龍門桐」（「郊廟歌辞」「周祀方沢歌・青帝雲門舞」）、「洞庭鐘鼓、龍門瑟琴」（同「周祀宗廟歌」昭夏降神　※第一句は「律在夾鍾」）、「龍門之下孤桐、泗水之濱鳴石」（「燕射歌辞」「周五声調曲・羽調曲」其四）。

(22) 庾信の「擬連珠」が内容面において、「哀江南賦」、「擬詠懐詩」と深い関わりを持つことは、呉冠宏「庾信四十四首擬連珠

試探――兼論〈哀江南賦〉、詠懐詩与連珠之比較」（『中国文学研究』6所収、台北、台湾大学中央文化研究所、一九九二年）において明らかにされている。

(23) 「龍門死樹」については、清の倪璠の注に、「龍門死樹、桐也。……咸池、黄帝楽名。此章喩己雖身在北朝、而心存南国。譬之蚌枯而珠在、樹死而曲存。此心終為梁也」とある。また、倪注に枚乗「七発」の「龍門の桐」を指すものとされる梧桐が、「擬連珠」第二十七首（下記）にも見える。「蓋聞五十之年、壮情久歇、憂能傷人、故其哀矣。是以譬之交讓、実半死而言生、如彼梧桐、雖残生而猶死」。

(24) 「廼有拳曲擁腫、盤拗反覆、……匠石驚視、公輸眩目。雕鐫始就、剞劂仍加」。なお、これは後漢の崔琦「七蠲」（『芸文類聚』巻五十七）に拠るものである（下記）。「爰有梧桐、産乎玄谿。伝根朽壌、託陰生危。……匠石摧肩、公輸折首。目眩肌戦、制以為琴」。つまり、散木のように描かれてはいるが、この木の本来のモデルは、琴の材料である梧桐なのである。

(25) 「若乃山河阻絶、飄零離別。抜本垂涙、傷根瀝血。……横洞口而欹臥、頓山腰而半折」。

(26) 「況復風雷不感、羈旅無帰、未能採葛、還成食薇。沈淪窮巷、蕪没荊扉。既傷揺落、弥嗟変衰」。なお、この条を魯同群氏は『庾信伝論』（天津、天津人民出版社、一九九七年）に、庾信が不遇な状況に甘んじることを望まないことを述べるものである、と見なす。本文は次のとおり。「文中強調最多的、乃是対自己年齢漸老、而仍〝沈淪窮巷、蕪没荊扉〟的不満与不甘」（一八七頁）。

（附記）小論の脱稿にあたって、合山究、静永健の両氏より貴重な御教示を賜った。この場を借りて謝意を表したい。